

Milton の National Mind

——ミルトンの乗りこえたもの——

室 田 五 郎

I 「ブリテン島をわが世界として」

ミルトンは1625年に大学に入り、在学中1628年（19歳）に *At a Vacation Exercise in the College part Latin, part English* をかいている。この英語の部分は次のように始まる：

「幸あれ、母国の言葉、筋弱くして

わが初めに努力する舌を語らせんと動かしたり……」（II, 1, 2）

この詩は Tillyard によれば二重の関心と呼ぶものであり、「独特なミルトンの雄大さによってリズムが支えられた最も初期の詩を含むもので、又それはミルトンが当時の英詩を批判的に意識していることを示す」⁽¹⁾ のである。

上に掲げた二行のあと、ミルトンは二年前に英詩を書いて以来、ラテン詩のみ書いていたことを述べ、英語に敬意を払わなかったことを述べている。7行目から

「ここにて我、汝に会釈し、許しを乞う、

今汝を我が後半の労作に用いんと：

彼処より汝に来るはわずかなる損失にて

我知る、我が舌汝に恵むこと少なし、

汝最先にならんと野心は要らず、

信ずべし、我彼処にていと悪しきものこそ包みたり：

加うるに我が先に述べし如く事成らば

いと美味なる料理最後にあらわるべし。

されば汝に乞う、汝の力を我に拒むなかれ

我かかる小さき粗略を為せりとはいへ；
然も直ぐに急ぎて、我に一たび快樂を為せ
又汝の衣箱よりいと安き宝を出せ」(11, 7, 8)
しかし結局言いたいことは次のことである。

「されどかのいと豊けき衣と晴れの装いを集めよ、
いと深き霊とすぐれし心が願うところの」(11, 21, 22)
そしてミルトンは心の中に張りさけんばかりの思いが表現を求めて疲
れ果てていることを述べ、且つ言う、

「されど我、撰ぶを得れば、むしろ
更に大いなる主題に汝を用立てん
即ち、汝我が思いを良き音に包む前に
汝に己が宝庫を探し求めしめるが如き、
又、深く酔いたる心が高く舞い上りて
回転する極の上に至り、且つ天の入口にて
中を覗き、幸いなる神の姿を見る如き
即ち神がいかづちの玉座の前に伏し
髭こき Apollo の歌に聴入る、そは黄金弦の
調べに合わせたり、その間 Hebe
不死の酒を彼女の父なる王に運ぶ：
次に尽きざる火焰の天空を通り抜け
直下なる広大な大気の霞掛かる処を抜け
又雪白き山々といかづち積る高みを抜け、
遂に知る碧眼の Neptune が^{あつめ}伏えるさまを、
それ天の權威に逆らいつ波を結集て構う
更に歌え、老い進める Nature が未だ
揺り床に在りし頃に起りし秘密のことども
又終りに、王や女王、又英雄達のこと
即ち昔 Alcinous 王の宴にておごそかに
知恵深き Demodocus が詠じて語りしごと
悲しき Ulysses の心、又他の者みな
その美しき調べに魅了されて
自ら喜びの中に甘きとりことなりし時に、
されど急げ、我が迷う Muse よ何とてさすらう！ (11, 29~53)

この詩から、ミルトンが何か切迫感があるために英詩を決意し、しかも言いたいことが心中に募っているらしいことがわかる。そして「むしろ更に大いなる主題に汝を用立てん」といって英語に過大ともいえる（ミルトンはそう思っただろう）期待をかけているのである。かくて「いと深き霊とすぐれし心が願うところの」豊かな表現力を持たなければ「更に大いなる主題に」ふさわしくないと思っていたことになる。

しかしミルトンは「更に大いなる主題」が何であるかについては、極めて歯切れが悪い。神々のことについて強い興味があることは確かであるが、それには満足していないことは「更に歌え、……秘密のことども」といっていることでわかる。次に Homer の叙事詩に比べうるものを詩にかきたい旨の感想を述べている。そして「されど急げ、我が迷う Muse よ何とてさすらう！」といらだつのである。

Ricks は「1628年のこの機会に書いた詩は英語そのものに捧げている。それは未だにラテン語で書くことが壮大であるとみなしていた死んだような古典主義をしりぞけてなされた」⁽²⁾ といっている。

ミルトンに英語を書かしめたものは何か。そしてそれが彼にどんな英詩を生涯を通して書かしめることになったか。これこそ甚だ興味あることである。ミルトンの初期の詩において彼に著しい影響を与えたのは誰であったか。ここに DuBartas の名が浮かぶ。DuBartas はミルトンがはじめて英詩を書きはじめた15歳の頃の、詩篇 114 篇のパラフレーズからずっと影響を与えつづけてきたからである。

Guillaume DuBartas はフランスの宗教詩人で、プロテスタントであり、創世記にもとづき聖書のテーマの、神の世界創造物語を詩にかいた(1578)。それは当時非常に人気があり、ラテン語、スペイン語、イタリア語、英語、ドイツ語に訳されて読まれたといわれる。英語訳は Sylvester によってなされていた。英語訳の題は *Divine Weeks and Works* (1605-1607) であった。これがミルトン (b.1608) に与えた影響はミルトンの野心を育てつつ方向づけたであろう⁽³⁾。当時 Sylvester は高潔なる教訓的詩人として名声を得ていたのである。

次にミルトンの St. Paul's 時代に、校長であった Alexander Gill の著した英文法書が彼に大きな影響を与えたといわれる。この本はラテン語でかかれていて、Spenser が多く引用されていた。「Spenser は英国の Virgil であり、英語の古典であり、彼の博学と彼の古典への不断の

依存の点では国際的であり、英語の作詩法の標準のきめ手となった点では、イギリス国内に関していて、まじめな文学というものが、何語を問わず、一つの偉大なる人間の伝統に属するものであると、ミルトンは学生時代に信ずるようになった。現代語であっても、なおかつ国際的であるべきだと信じるようになった。」⁽⁴⁾即ち言いかえると、ミルトンは英文法の手引きによってヨーロッパ文学と英語文学との関係を知らされ、ヨーロッパの古典の表現方法が英語文学の先輩詩人の表現方法と深い関係があることを学んだのであると言えよう。

英文法書がラテン語で書かれたということは、今日の我々には理解し難いことだが、これに至る英語の生い立ちを短くふり返って見たい。周知の如く1066年のノルマン征服によって、英語はその後約3世紀にわたって公用語の位置を奪われていた。

このことから、ヨーロッパ各国語に比べて、如何に英語が後進性を運命づけられていたか明瞭であろう。エリザベス朝時代の文学の開花期にはヨーロッパの文学上の形式を英語にうつして見る努力や、高い文学を知る為の古典の英訳がはじまり、これが高度の文学内容を伝え得る表現能力の開発に関係があったことは間違いない。そして英詩人達の関心が古典に匹敵する文学を、英語をもって達成することであることが一つの伝統として認められるのである。

英語という後進言語にとってヨーロッパ並みの能力を獲得することは、何よりも高度の表現力に耐えうる能力をみがくことであったろう。しかも愛国心の昂揚と共にそれは急務であったと言えよう。古典から多くを学び、それをふまえて批評精神がヒューマニスト達によって紹介された。そこから論争がおこり、詩論が公けにされてきたことは、批評家達が自国語に大きな期待をかけてきた徴しであった。

有名な Sydney の弁護は Aristotle にもとづいて論じている。その中で Sydney は英語が十分な力を持ちはじめていることを述べている。この弁護は英語の為に楽観的な見通しを立てたと言えよう。だがこの弁護が出た背景を見るなら、その時代が不安に満ちた時代であることがわかる。古典学者達にとって英語がひよわで内容も低いと見えた。Campion が形式よりも古典的壮重さを目標とすべし、それ故に押韻を捨てよと主張した(1602)のはこのためであったと言われている。したがってこの頃、英語のあるべき実力の目標が、古典語の如き莊重体であると人々に

考えられてきたことは明らかである。

Tillyardは、ミルトンがイタリー旅行中にイタリー語が英語よりも優れた言語と感じたであろうと言っている。ミルトンの脳裏にあるものは常に英語のことであって、内容を何にするかが次にあったようである。内容については、理想的なものを探し求めていたために、なかなか決まらなかったというのが本当であろう。

彼が何を考えていたかを示すものに、散文の *The Reason of Church Government Urged Against Prelaty* (1642) がある。これは英国国教会の在り方に反論を加えたものであるが、その中でミルトンは謙遜しながらも、止むに止まれず筆をとり、なりふりかまわず書いたと弁明し、自分の天職と心得ていた詩作を投げうって、低い次元で低い問題を、みじめな思いで書いていることを告白している。ミルトンにとって一番ゆううつな時であったことが読みとれる。そういう時に彼は、最近果たしたイタリー旅行のことを思い、愛国心の高まった興奮で、次のように書いている。

「我かくて、彼等及び国内なる友等に語り始めたり、これ日々に募る内なる切迫になりしこと少なからぬものにして、それ次の如し、即ち、はげしき勉学(我勉学をこの世の我が授かりし人生とみなす)によりて、我が強き根性をも加え、後世の人が仲々に捨て難きものを、恐らくは書き残すならんと。かかる思い我を直ちに捉えたり、又次の如き思いもあり、即ち、三代代に、又それ以上に亘り人々借地権を求むる如く、もし我書き残すこと確かならば、我が祖国の榮えと導きを求めつつ、神の榮光の他に如何なる考慮も払わるべからずと。かかる大義の為、又それのみか、我ラテン詩人の間にて二位に位すること難かるべしと知る故に Ariosto が Bembo のすすめに反して採りし決意を我自らに適用し、我が母国語を飾るべく全力を挙げんとせり、そは、奇を衒いたる言葉を得ん為ならず(それ勞多く空しき故)、母国語もて、この島の同輩間に至上、至聖なる事共を伝え明かす者とならん為なり。即ち、アテネ、ローマ或は現今イタリーのひと大いに優れて賢者たち、及びかのヘブル人らが自が国に為しし事をば、加うるにすぐれてキリスト教徒なる我が分際故に、我が国にも為し得ん為なり。我が名を海外に一度なりとも知られんと欲せず、或はそれを遂ぐることあり得るとも、かえりてこのプリ

テン島を我が世界として満足す。その運勢、これ迄かくの如し、即ち、人語る如く、アテネ人らが己れの小さき功績を、雄弁なる作者達により偉大にかつ誉れ高からしめしに、英国は、その気高き偉業を僧侶・職人共の拙き扱いにより卑小にされたり。」(傍点筆者)

ミルトンが大陸に出て、祖国に愛国心を抱いたであろうことは想像に難くない。しかし大陸で見たものは何であったか。彼は自分のラテン詩に、イタリー人にさえないかなか与えられないような賛辞を受けたといっているほどであり、ラテン語への魅力捨て難く、またラテン語に巧みであったことからして、「……我、ラテン詩人の間にて二位に位すること難かるべしと知る故に」というのは謙遜でもあったろう。また一つには、時代の流れから見て、ラテン語で英国の気を吐くというのは愛国心につながるかどうか。結局、国籍不明の努力になってしまったかもしれない。

そしてミルトンは同胞に対しても、また内なる良心の声に対しても、一つの決意を固める。即ち、母国語で神の御名を輝かし、母国の名を高からしめるものを書くことであった。即ち、「その気高き偉業を僧侶・職人共の拙き扱いにより卑小にされた」英国が「雄弁なる作者達により偉大にかつ誉れ高からしめ」られるべきことを深く思い、自らにその重き責任を課したのである。

ここでもう一つ注意すべきことがある。それはミルトンがラテン語から母国語へのきりかえに大きな強調点をおいているということである。ミルトンの他にラテン語と英語の両言語に達者であった古典学者がいないわけではないし、またミルトンがすっかりラテン語で何も書かなくなったわけでもない。このへんの事情を説明するのは、「我が名を海外に一度なりとも知られんと欲せず」という彼自身の言葉であり、「或はそれを遂ぐることあり得るとも」という彼自身のためらいの言葉である。言うまでもなく、海外とはヨーロッパのことであるから、彼の決意はヨーロッパとの関係で考えられなければならない。即ち大陸とのつながりで英国の気を吐くべきか、全く大陸から自分を切り離して愛国心を純粹に保つべきかという迷いが、ミルトンの心の中にあったのであろう。ミルトンは大陸で得られる功名に強く引かれたのかもしれない。

母国語で書くことを決心するいきさつを、Ariosto がラテン語を捨てて母国語で詩作をした話を持ち出して語っていることは、彼の迷いの大

きさを示すものではなかろうか。

Vacation Exercise (1628) から *The Reason of Church Government* (1642) まで14年間の経過している。そしてこの14年間の時間を同じ決断が埋めていることは、彼がこの決断を再確認していることを示している。彼の心の中にはヨーロッパの中の母国の面目が問題として存在していたにちがいない。

ルネサンスにおけるラテン語から各国語への方向づけには、16世紀におけるフランスの、スバル派の7人の詩人たちによる宣言 (manifesto) があった。この詩人達は Belley によって代表される。彼は、彼の「フランス語の弁護」(1549) において、ラテン語の代わりに、文学言語としてフランス語を用いる事を主張した。Sydney の弁護が1580年であるから、それよりも30年も以前のことである。

Belley の提案は韻を用い、韻律を複雑にし統語法や構造を複雑にして言語を豊かにすることであった。これが内外に反響を呼び、英語にも影響を及ぼしたと言われている。

Spenser の *The Shepherdes Calender* が1579年、*The Faerie Queene* が1590年であることは興味深い。Belley は母国語を用いて、母国語の先輩詩人の一級作品をモデルにすることをすすめている。だがギリシャ語、ラテン語の詩人を第一のモデルとすることをすすめていることは見落とせない。

ミルトンの場合、彼が *Church Government* で述べている如く、Ariosto (1474-1533) の精神にいたく感銘を受けたらしい。Ariosto といえば実に Belley の宣言より以前の人であった。勿論、当時の考え方に沿ってミルトンも Spenser を母国語の先輩詩人として尊敬しかつ他人にもそう語ったようである。しかしそれ以上に、モデルとして考慮していたかどうかは別問題かもしれぬ⁽⁵⁾。

II 「わが国語を飾るべく、全力をあげん」

ミルトンが詩人として、特にラテン語から英語へ切りかえる決心をした詩人としてどのような戦いをしたかということは興味深いことである。第一に初期の作品において、彼が種々な詩作上の実験をしていたことは、よく知られている。

1629年に、彼は *Nativity Ode* を書いた。この年に彼は叙事詩人になる決心をしたらしい。その翌年に *The Passion* を書いたが、未完成のままに、ほうりだしてしまった。このへんの事情を、彼が *Nativity Ode* が成功したのに気をよくして、さらに格調の高いものを書こうとして表現力及ばず、失敗したのだ、と Tillyard は見る。

ここで彼は、振り出しに戻り、内容の軽いものから再出発を余儀なくされた。May Day について書いた *Song. On May Morning* がそれを示している。同じ頃、ミルトンは“O nightingale…”ではじまるソネットを書いたが、それがラテン語に近い語順を持っていると指摘されているのは興味深い。それは、詩人自身がラテン語詩そのものから応用したものというよりも、Giovanni Della Casa の詩からの影響であると考えられている。

On Shakespeare という詩は、ミルトンの内なる戦いを示す点で興味深いものだ。*The Passion* の失敗が彼に迷いを強いている間、自然に Shakespeare が彼自身にどんな意味をもっているかを、謙遜な気持で振り返った頃にかかれたものであるようである。その意味で Shakespeare の Second Folio にのった彼の詩は決して単なる儀礼的な意図からでたものではないと Tillyard は言う。もしそうなら、ミルトンの“the shame of slow-endavoring art”に対して Shakespeare の“easy numbers”は、彼のまじめな実感であったろうと推測される。

この頃からミルトンの詩には、彼の個人的な思想の展開が見られるようになる。彼の内なる戦いを示すものにもう一つの詩 (Sonnet VII) がある。

「いかに疾く、若さを盗む時が

翼に乗り我が二十三年を奪いしことぞ、

我が駆け行く日々満ちし業もて過ぐ

されど我が遅き春、蕾も花も出さず、

恐らく、我が容姿真実を欺くならん、

我、成人の間際にかく近づきしに、

又内なる成熟、更に見栄え少なし、

或る者我より時に恵まれ幸いなるに、

されど多きにも少きにも、早きも遅きも

そは常にいと厳しき公平なる尺度もて

貴賤を問わず人に、等しき運命に向かう、
その運命に向いて時は我を導く、神の御意も然り。

凡ては、我、それを斯く用う恵あらば、

変らず業を求むる我が大いなる主の御前に在り。」

この詩は学生時代に Lady と言われた彼が、23歳になっても、年齢より若く見えたのを悩んだとも受けとれる詩であるが、「又内なる成熟、更に見栄え少なし」という表現には痛々しいひびきがある。高き主題と壮大なる調べを追求した詩人にして見れば、早く期待通りの熟成に到りたいというあせりがあったろうと想像される。しかしそのあせりにもかかわらず、神の御前ではじっと神の導きに任せる以外に何も為し得ないのだという従順さと、神の導くままに自分を伸ばしていこうとする決意とがこの詩の中に読みとれるであろう。

この後彼は時代の好みの作品を残した。即ち *Arcades* という仮面劇を書いたことである。それは成功し、その成功により、再度依頼を受けて仮面劇 *Comus* をかいたことはよく知られている。ミルトンは依頼されてかいた作品の中に高いテーマと壮大な調べに注意深く迫ろうとしたようである。

また *On Time, Upon the Circumcision, At a Solemn Music* という短い詩の中にも注意深い思想的展開が見られる。そして彼の友の死を悼む詩 *Lycidas* (1637) において、静かな中にも重々しさと心の抑制に満ちた表現力を獲得している。この詩の中に、友の死を語りながら、むしろ友の死以外のことで大いに語っている詩人の野心をうかがうことができる。

先にも引用したように、ミルトンが「我が母国語を飾るべく全力をあげ」と言った (1642) のは *Lycidas* (1637) に至るまでの詩作の研究と努力を指しているに違いない。その努力に全力を注いだミルトンが恐らく考えていたことは、英語がラテン語からうけている圧力とヨーロッパ各国語から来る衝撃とであったろう。それらを乗り越えるために、彼は「幸あれ、母国の言葉」と英語に呼びかけたのであった。そして英語をもってヨーロッパ文学の戦列に加わることが Chaucer 以来英国文学の意識であったと言えなくもない。

今日我々にとって「幸あれ、母国の言葉」というミルトン自身の言葉を、その意味の重さにおいて感じることはむずかしい。またそれに気づ

かなくても、また全然問題にしなくても、ミルトンの評価は決して減じることはないであろう。しかしそれがわからなくても、ミルトンが英語にもたらした楽しさとすばらしさが如何に大きいかは Matthew Arnold の次の言葉で明らかである。

「もし高度の、一点のきずもない卓越さに対する尊敬を持つ訓練が我々に特に必要とされるならば、ミルトンこそあらゆる天才の中で最高の教程となり、最高に有益な感化力である」⁽⁶⁾

また E.M.W. & P.B. Tillyard 編の学校教材としてのテキスト *Comus and some shorter Poems of Milton* には次のような序文が載っている。

「一つの理由は（そして大へん大事な理由だが）ミルトンの短詩は永年、そして今もなお、教養ある人々の共通する知識の一部なのである……もし大ていの生徒達が、詩が引用され、読まれ、話すことを学びながら、詩のフィーリングを学ぶに至るような家庭に育つなら、学校は、そんな仕事（＝詩の授業）から手を引いた方がいい。しかし実は、大ていの生徒にとって学校が唯一の環境なのである。……詩が詩として学校で教わるものなら、ミルトンの短詩は、その目的にすばらしく合致する……」⁽⁷⁾

そして Tillyard は、ミルトンによって血となり肉となったヨーロッパの詩の伝統（神々から、Ovidism, Platonism に至る迄も）を楽しみ、かつ学び、学び、かつ楽しむことが英国人の文学教育において意義ありと見ている。そしてミルトンほどこれを巧みに成し遂げた詩人は少ないとするのである。テキストを通して若い英国人に訴えている Tillyard の言葉はミルトンが英語そのものに如何に大きな影響力を及ぼしたかを考えさせるに十分である。

またミルトンの *Paradise Lost* については、Louis L. Martze は F.T. Prince に同意して語る。

「ミルトンの語の並べ方の更に大切な点は、彼のスタイルが天才の気儘な奇異なる作品ではないことだ。かえって Virgil の模倣の、ヨーロッパの大伝統の一部なのだ。それはミルトンがイタリアの詩のことを直接良く知っていたことにもとづいていたのだ。つまり、彼の叙事詩スタイルは、英語でイタリア人のよく為し得たところを巧みに果たそうとしたことにあるのだ……同時にミルトンの主たる

目的が古代の叙事詩の様式を、キリスト教の主題を歌うために『ほん訳』するためのものであったことを思いおこさせるものである……」⁽⁸⁾

また Martz はミルトン批評の歴史を概略した中で、Eliot がミルトンに対して感情的に嫌悪し、ミルトンが英詩に「悪影響」を及ぼしたときめつけ、邪魔扱いをしているのは、要するに現代詩人が Victoria 朝時代に反抗しなければならない時が来ているのに、ミルトンが Victoria 朝時代に模範とされていて、反抗がうまくできない、ということだとしている。

またミルトンがあまりに様式的で儀式的な詩をかくので、何か貧困さがあると批評する人々に対して、Martz は C.S. Lewis を紹介して語る。「だが Lewis が、ミルトンがラテン語的構造を用いたことに賛成しているのは、それが普通の英語の用法に必要な『きまった言葉の順序』からある程度、詩人が離れることを可能にしているからだ、そして『かくして文章の中にいろいろな考えを、彼の好む順序に入れていくことを可能にする』のだ……」⁽⁹⁾

そして、ミルトンの言語征服についての評価を Christopher Ricks は、彼のミルトン作品紹介の序文において、「これはある程度すべての立派な詩人についてあてはまることだ」と断わりつつも、次のように語っている。

「ミルトンは英語という言語が、如何にいろいろに壮大であるか理解する我々の必要を、すばらしく助けてくれる。そして我々が言わんとすることを、英語は如何に念入りに伝達することができるか、そして又我々が言わんとすることを、英語は如何に器用に発見するのに役立っているかについても、然りである。ミルトンの言語征服は我々の美意識のみならず、我々の人間意識をも、固めているのである」⁽¹⁰⁾

これは偶然ではない。ミルトンは自ら次のように言っている。

「或は内なる人の思いの一筋縄でいかぬ微妙さ、及び逆流にて激情又は尊敬をもつものすべて、かかるすべての事を強固にして扱いうる流ちょうさもて飾り、かつ述ぶること、かつ、斯くの如き楽しき備える具体例を挙げ、全体に亘り真理を上品に飾り立てずば、真理をみることすら無き、傷つき易く微妙なる人々に特に教うることな

り」(*Reason of Church Government*)

我々はミルトンの言葉の中に何か大きな野心があることを感じとる。即ち、強靱な神経に恵まれた詩人が、その強靱な、だが美しく精緻な表現で、良心のゆらぎがちな同朋達に、おどろくべき秘密を示そうとするような、固い決意を感じとる。ミルトンは未だ若い頃に、宇宙の秘密を求めていたが、その秘密、即ち真理、とくに宗教的真理の幕屋に英国国民に触れしめようとしているかの如くである。Ricks のいう「ミルトンの言語征服」は確かにミルトンの果たそうとした役割であったろう。

Ⅲ 「異教の神々が己が宮にて敗れた」

Paradise Lost が最初から訴えていることはすべての人間の運命についてである。それを人間の内部にひそむ「罪」の深みにおいて捉えている。そして「罪」は人間の共通の恥部である故に、読者は他人事としてではなく、否応なく敏感にならざるを得ない。詩人は語らんとする真理を聖書から取り出し、それを物語の枠とするだけでなく、むしろそれをテーマとして、いきなり詩を語り始める。遠いギリシャの神々の物語ではなく、同時代すべての人々が信じる（当時無神論はありえなかった）神を示す聖書からテーマが得られ、その冒頭の祈願は「生きている神」に捧げられているということが、読者をしていやが上にも緊張させ、敏感ならしめる出発点ではなからうか。

それはRicks も言うように、読者に議論をしかけているのであり、それが語る秘密は、現実の読者の秘密である。それ故この詩は、単に美しく、壮大で、感動的であればよいような叙事詩ではなく、そういうものを乗り越えるものであることが指摘されるべきであろう。この点で明らかに詩人は、ギリシャの伝統を乗り越えようとしているといえるだろう。詩人はそれを確認するかの如く、

I thence

Invoke thy aid to my adventurous song,

That with no middle flight intends to soar

Above the Aonian mount, ... (I. 12-15)

と言っている。詩人がこのように言うのは、彼自身の思想の裏づけをもつて言えることに違いない。その裏づけには今ふれない、ただ、異教の

伝統を越えるものがあると胸を張っている野心があることをここで見逃せないのである。

ミルトンにとって、彼の詩心を第一に衝き動かしたのは、野心的なイギリスの面目であり、その初志は母国語の強化であることは先に述べた。若きミルトンの作品の中には、必ずしもキリスト教が前面に出ていないようである。*At a Vacation Exercise* における「天の權威」とはギリシャ神話をはみでていないし、「聖なる興奮」も「靈感」も *On the Coming of Spring* の中では全く Ovid 流の、極めて感覚的、官能的なものでしかない。しかし彼の親友 Charles Diodati に書いたラテン語の手紙では微妙な変化を見せている。即ち、詩人は、彼の愛は詩の韻律にとじこめられるべきではなく、彼の愛は非常に強くて完全なので哀歌では歌えない、といって、暗に詩神からは十分に彼の満足が得られないと言っている。また彼は別な個所で、Ovid はダニューブの国から下手な詩を送ったといって悪口を言っている。そして詩人は親友に、目下キリスト教の神について歌いつつあり、「星空、上天における天使の軍勢の讚美の歌、および異教の神々が一度に己が宮で敗れたことを歌っている……君にはまだきかせたい他の歌もある。それは、私の母国語に単純に合わせたもので……」と語っている。

ミルトンの心の中には、キリスト教の神が異教の神々を追いつぶす戦いが始まっていた。*Nativity* の hymn においては、

(XVIII) 「かくて、我等の幸い、遂に

満ちて全く成る

されど今始まる；それこのよき日より

かの年を経し地下の竜

狭き罫いに繋がれしが

奪いし権力を半ばも拡げず

己が王国の成らぬを見て怒狂しつ

その巻ける尾より鱗卑しき慄え打つ、

(XIX) 神々の託宣は黙し

如何なる声も恐るべき音も

欺く言もて天蓋巡りて走らず

Apollo は己が宮より

はや予見する能わず

空ろに叫び Delphos 山を通る

夜毎の靈驗、靈的魔術も

生氣失せし宮守に庵より靈感せず」

と神々の追い落としを明確にしている。

しかし、この詩のはじめの部分の歓喜には、生き生きとした本来異教的なる表現と、キリスト教的な歓喜が実に巧みに合わされていることを見出す。

ミルトンは *Nativity* と同年 (1629) に叙事詩人になる決心をしたと言われる。叙事詩人になるについて、彼はアーサー王物語を考えにいれていたことはよく知られている。王が国民の指導者であり、モラルの中心であり、国民が慕う魂であると思っていただろう。当時の議会でさえ、王を敵としたのではなく、王の権力を制限することのみを意図していただろう。当時の政治は宗教ときりはなせない。王権と議会の発言力のバランスの上に理想的な国家が生まれると、彼らは考えていただろう。しかし目まぐるしい政治の変化の後、王権と議会は衝突し、遂に王を断頭台に送り、ミルトン自らがそれを肯定する立場になった。何という変わりよう、彼にとってアーサー王物語が何になりえたろうか。

Tillyard は、1644年または1645年以後に、ミルトンがアーサー王物語の計画を止めたと見ている。この後詩人は理想を見失って、徹底的に人間の姿を思い知らされたであろう。そして *Passion* 以来遠ざかっていた聖書物語に返って来たのである。理想を見失った詩人は理想を語ることはできない。

しかし彼は真理を新しく探し求める必要はなかった。逆境の中で失望した彼は、本質的に楽観主義者であった。彼は失望の日々に *Paradise Lost* を書いたが、それは彼が国家的英雄の夢をあきらめて、再びスタートに戻ったのだと言えよう。そこには人に対する神の計画を語りたいという自負があり、それを語らなければ、自分の失望の意味が空しいと彼は感じたであろう。詩人が国家的英雄の夢を捨てたことが、それ以上のもの、それを超えるものに自分自身を投入することでなければ無意味であったろう。かくて、一そう心を低くして、一そう高いテーマに耳を傾けようとしたに違いない。彼が聖霊に耳を傾け、神々への冒頭の祈りの伝統を超え、自分自身を乗り越えようとしたところに、彼が *Paradise*

Lost を書いた時の初心があったであろう。

IV 「操を愛せ、高く……昇らしめん」

ミルトンはピューリタンであり、ルネサンス詩人であり、プラトニズムは彼にとって好ましい詩的想像力であつたらしい。それが人間の向上心、特に魂の向上というテーマをもつからであろう。しかしこの想像力が下から上へと向かい、神々の神域への接近という野心を起こさせても、それは、ミルトンにとっては乗り越えられなければならぬ何ものかであった。*Comus* の最後がそれを示している。

「我につづかむ人々よ
操を愛せ、ただこれのみ自由、
そは汝らに高く昇るを教え得て
高く天の調べを越えて昇らしめん、
されどもし操自ら力無くとも
神自らが彼女まで身をかがめん」

ここにおいて詩人の興味が、神自身が人間に降ってくることに向いていることを示している。ヘレニズム的福音書ヨハネ伝が「言^{ことば}は肉体となり」により、思弁的観念的ギリシャ思想の影響の大きかった小アジアを意識して書かれていたとすれば、ミルトンがこれに沿って同じ克服をここに思いついたとしても不思議はない。

ミルトンは *Paradise Lost* の中で言う：

「この故に汝（イエス）の謙遜は汝と共に
汝の生をもこの座に高めん」（Ⅲ 313, 4）

プラトニズムにおける「肉体の汚れ」はミルトンを悩ませず、むしろ神の子が受肉する神学をもって、清純な魂と汚れた肉体についての問いを乗り越える⁽¹¹⁾。ミルトンはプラトニズムを排斥したのではなくて乗り越え、プラトニズムの表現はキリスト教化されている。（Ⅴ, Ⅱ, 469-500）

ミルトンは、はじめに抱いた詩人としての野心をアーサー王物語に託そうとしたにもかかわらず、忙しい政治の世界への没入した時期において、それをすっかり駄目にされてしまった。すべては悪夢であった。神がこの詩人から一切を奪ったように見える。即ち自由は滅び家庭はすさび、視力は失せた。少なくともミルトンから政治の世界に熱情を燃やし

めた理想への想像力の源を神が絶ったといえないだろうか。しかしこの方法で神は詩人に別な歌をうたわしめたのである。つまり詩人は、はじめの人間的テーマを振りきって、人間の根源の「秘密」を「聖霊によって」歌わしめられた。それは失望と逆境とのぎりぎりの戦いが彼の全人格を支配していたから、神への証しをするべく神に用いられたと言っても言い過ぎではないかもしれぬ。それ故詩人はいつか自分本来の人間くさい野心に立ち返る日が来ることを欲したのであろう。

『Paradise Lost』を書き上げたミルトンは、最も根源的な悪魔との対決とその克服を示しているのだが、議論好きなミルトンは本格的な直接的な対決乃至克服を果たしてみたいと願っていたのではないだろうか。そしてそれこそ、キリストの荒野の誘惑が果たしうるテーマであった。勿論それが *Paradise Regained* であり、その冒頭の祈りが示すとおり、キリストの救いが全人類に及ぶことをうたったものであるが、その中のキリストとサンタとの議論で、詩人は何を言わんとしたのであるか。

詩人は *Paradise Regained* の中で再度サタンに生命を吹きこみ、その言うところ、実に魅力ある甘言を語らしめる。その中に、ヨーロッパの伝統が尊敬して止まぬ文化や精神における古典以来の体系が述べられている。その甘言に対するキリストの徹底的反論と勝利は、ヨーロッパの伝統的価値観に対するそれと、分厚く二重写しになっていることは見逃せない。

Samson Agonistes はミルトン最後の作品であるが、Samson と詩人自身の間に大きな類似がある故に、自伝的な要素があることは、多くの人々の直感するところであろう。しかしこの作品は英文学史の中では孤立した作品であり、完全にギリシャ演劇の約束に則った作品であり、当時までに発達して来た演劇の流れからは浮き上がっているもので、古典精神に息づき、「ギリシャ悲劇の雰囲気都在这里に生きている」⁽¹²⁾。

ミルトンのこの悲劇は、神に用いられて犠牲となる人間に対する関心から出発しているように感じられる。だが Samson は、はじめから悲惨な結果になるときめられた人生をもっていたのであろうか。Samson は祝福を受けて生まれた人間であることは Samson 自身の口によって語られている。しかしそれを認めているのは、Samson が自らの弱さから敵に捉えられたその苦悩に於ける回想においてである。敵の手中に在ること自体悲惨であるが、本当の悲惨は彼の心の中にある。神につかえると

予言されている自分が、神の御名を汚しているのであり、勇士どころか、無能な姿になって敵の笑い物になっている。それはすべて自分の罪故であり、この罪が罰を受けて自滅することによってのみすべてが帖消しになると思っている。(II, 573-576)

しかし悲劇の真髄は運命への服従であろう。そしてその服従の悲惨さを通して、狂気と絶望を経、一つの強固な精神的清明さに入る。Samson は自己中心の後悔から悔改めに入り、生きる限界の唯中において自分の使命を果たすことを、この悲劇作品は示している。しかし注目すべき点は、外界から悲劇が生じているのではなく Samson の罪そのものから悲劇が生じていることである。

これを理解するには、詩人の経験した失望と、そこに学んだ人間の姿の理解が考えられるべきであろう。即ち、人間の企てには失敗ということがある。だが神の計画にも不成立ということがあるだろうか、と彼は考えたかもしれない。勿論神は遂げんとすることを、起こりうる一切の逆流と停頓にもかかわらず完遂する。しかし人間の予想とは全く反した形で完遂するかもしれない。神意は常に人の欲望とくいちがう。ミルトンがそのはげしい戦いの中で摺んだ人間の姿の理解は、このように神と人との断絶においてであったかもしれない。これは理想主義者ミルトンが味わった苦杯である。結局人間という存在に無罪ということがなく、人間の計画に神への不敬が存在しない筈がない。このことは、神を信じる者、神の選民、とくに神にえらばれた Samson にとってアイロニーとなる筈である。そして、そのような人の欲望を神が砕くことを専らとする時、またその如くして神が神の支配のうちにすべてを収め、栄光を輝かす時なおさらである。しかしそのような方法で神はこの世界を清めつづけているのではなからうか。しかしこのアイロニーは人の罪ゆえなのである。

神意はどんなことがあっても達成されるが、Samson は破滅のみを知る。ただ死を選ぶだけが残される。恵まれた祝福からただ罪故の死へと向かう。これが Samson の悲劇の意味ではないだろうか。

罪を赦すことをもって始まる福音において、人間の罪が徹底的に人間自身にとって悲劇であることを認めることは、洗礼者ヨハネの荒野の声で明確にされている。この真理を疑いもなくミルトンの信仰が捉えた。ギリシャ悲劇の器を正しくわがものとしたミルトンは、その中に新しい

内容を盛ったといえないだろうか。

ミルトンの野心は完璧なギリシャ精神を再現することだったのか、それともキリスト教的な悲劇というむずかしいテーマにとりくむことだったのか。そのどちらでもある、とそう考えるのは確かに正しい態度であるが、それだけではまだ納得しきれないものがある、と Woodhouse は言う⁽¹³⁾。ミルトンの野心は完璧な器には一そう完璧な宝を盛ろうとしたことにあったように思われる。

〔注〕

- (1) E. M. W. Tillyard: *Milton*, 1930, rev. 1966 Penguin Books, in association with Chatto & Windus, p-27
- (2) Christopher Ricks (ed.): *John Milton Paradise Lost and Paradise Regained*. The Signet Classic Poetry Series, 1968, p-vii
- (3) E. M. W. Tillyard: *Milton*, p-9
- (4) *ibid.* p-9
- (5) *ibid.* p-8, 9
- (6) quoted by Louis L. Martz (ed.): *Milton Paradise Lost* Prentice-Hall, 1966, p-3
- (7) E. M. W. Tillyard & P. B. Tillyard (ed.): *Comus and Some Shorter Poems of Milton*, George G. Harrap, 1952, 1968, p-12
- (8) Louis L. Martz (ed.): *Milton Paradise Lost*, p-6
- (9) *ibid.* p-4
- (10) Christopher Ricks (ed.): *Milton*, p-xiv
- (11) J. B. Leishman: *Milton's Minor Poems*, Hutchinson, 1969
- (12) A. W. Verity (ed.): *Milton's Samson Agonistes*, Cambridge U. P. 1966, p-1xv
- (13) A. S. P. Woodhouse: *Tragic Effect in Samson Agonistes* (in *Milton Modern Essays in Criticism*, Oxford U. P. 1965), p-466